天眼鏡

“三つ子”に体験の場を

昔から「三つ子の魂百まで」と言われるが、3歳ごろまでに感性や感覚のかなりの部分が形成されてしまう。身の回りを見渡してみても、いわゆる幼児体験がきわめて大切であることを実感させられることは少なくないが、その一つ、つい最近、出くわした話を紹介してみたい。

この4月から地元自治会の役員をやるはめになったが、はじめに飛び込んできた案件である。近所にある「どろんこ保育園」で鶏を飼育し始めたとかで、それにともなう騒音や悪臭が発生して近隣の迷惑にならないよう、自治会として申し入れしてほしいという要望が持ち込まれた。鶏の鳴き声がうるさいとか糞尿の臭いがいやだとか、分からぬではないが、むしろ子どもたちに鶏に触れさせ動物・家畜を身近に感じてもらうほうが大事で、自治会としては保育園の取組みを温かく見守っていくべきだと思う筆者にとっては、正直、気乗りのしない話であった。一応、保育園を訪問して、こうした声が会員から出ており、鶏舎の清掃等の手入れをしっかりするよう申し入れを行ったが、園長とやりとりしてみると、騒音対策として雌鶏だけの飼育にとどめており、また悪臭を発生させないよう毎日朝夕の清掃を徹底しているとのこと。引き続きの対策・努力をお願いし、後は個人的な興味もあって、鶏を飼育する園の方針なり全体的な取組みについて話をうかがってみた。一言でいえば「どろんこ保育園」というネーミングが園の取組内容を象徴しており、園内では靴を脱いでまったくのはだし、どろんこ遊びは勿論のこと、できるだけ体を使って体験し、そうした中での驚きや気付き、言ってみれば“センス・オブ・ワンダー”を大事にしているとのこと。

園の方針に大いに共感もし、その時のやり取りも踏まえて、あらためて先日、家内と琴と尺八を持って、子どもたちの前で純邦楽「六段の調べ」を演奏することに。前段でちょっとしたわらべ歌のようなものを弾いて、子どもたちに声を出してもらったり手を叩いてもらったりして親しみを持ってもらったうえで演奏を始めた。そうしたところが、こちらが驚くほどに目をキラキラさせ、体全体で音楽を感じようとしている園児が少なくなく、こちらのほうがすっかり感激。素人の下手な演奏ではあるが、これまでも機会があればいろいろのところで聞いていただき、それなりに喜んでもいただいてきたが、「音楽が聴いている人の体の中に入っていく」という感覚を感じたのは初めての体験であった。

自らの子どもの成長を振り返ってみてもそうであるが、「おむすびハウス」という、家内が中心になって続けている、遊んだ後、子どもたち自らがおにぎりを握って食べる学童クラブ的な活動で感じるのが、小さい子どもほどうまい、まずいがよくわかる。素材・食材の良しあしに敏感で、うまいとなったらあっという間に食いつき、まずいものにはまったく見向きもしない。それが大きくなるとほとんどが人工甘味料等の味に馴らされ味覚が狂ってしまう。味覚の形成でも幼児期の体験は決定的に重要だ。

話は飛ぶが、2015年4月に都市農業振興基本法が成立し、「宅地化すべき農地」とされてきた都市農地が「保全すべき農地」として抜本的見直しが行われた。グローバル化とともに、自給率が低迷する中で、都市農業の振興が必要だとされたポイントは、「多面的機能」だけではなく「多様な機能」である。すなわち多面的機能に加えて、農作業体験・学習・交流の場を提供する機能、農業に対する理解醸成の機能が明記され、ここに都市農業の重要な存在価値があるとされた。これは国内農業の再生にとっても大事なポイントであり、日本農業の生残り策の一つとして、食も含めた農体験・教育、そして交流の場を提供していくことが欠かせない。時代の変化がもたらした新たな着眼点だ。

（農的社会デザイン研究所　代表　蔦谷栄一）